

降り續く事があるが稀だ、晴れた朝など、眩しい程日光の反射で光つて目を害す、もし凍つてる場合は、小供が悦んでスケイトで遊びまはる、未だ溶けきれぬ内、又降り積る、消えては降り、降つては消へる、其の内大雨の爲め、ぬぐうが如く一洗ひに晒らはれてしまふ、山の雪は寒さで凍りついでいる、上から上からと降り重なる、容易に解ける暇がない、殊に日蔭に在る雪は、五月頃迄残つてゐる。

四月の中頃になると、梅や櫻が、そろ／＼山村の裏庭などに咲く。春霞で山の中腹あたりが、茫として、暖かい若芽の色が夢の様に感じる、そろ／＼峯の残雪が、模樣的に解けてくる、若草が日増に延びてくると、残雪も種々な形に變化する、長く帯を引いたのも、三日月形も、圓いのも、其の他色々な形に残る、甲州の白峰山脈の農鳥山には、鳥の形に残る、或は又信飛國境の爺が岳は、農男が、種を捲いている様、其の他蝶形に残つたり、何れも不思議である。

淺間山附近の山には、さうゆう神秘的な現象はないが、又火山的な面白い特色もある、特に色彩に於て、發揮されている、若草の柔かい緑と、あわい春の残雪と調和して、一種詩的な情緒をいだく事が在る。

凡ての點に於て、冬の雪よりも、春の雪、残る残雪が、最も繪畫的で、それで水彩的であると思ふ、寫生の場合にも、冬は水が凍たり、筆が泌しみみたり（信州では氷る事を泌しみると云ふ）其れが爲め、到底不可能である、偶水にアルコールを混じて用うる

場合もあるが、餘り功はない、寒國の冬の野外寫生に防寒の準備が出来ていけば、大丈夫である、若し雪中にて寫生せんとする人は、第一手袋筆を持つに差支へのないもの（雪焼けの爲め、足の指先を注意する事（之れは足袋の中になんげん、とうがらしを用う）雪の深い時は、大抵わらの長靴を用ふ、少し深い山に這入る時は、カンジキを持つ、冬季殊に雪中の寫生は、困難であるが、又痛快なる事も多くある、要するに準備が整ていければ、大丈夫成功すると思ふ。

巖谷小波氏の寄せられた感想

大下先生に、はじめてお目に掛つたのは、青梅に御閑居中の時でした、其頃彼地の四丁君に招かれて素人連中が寫生に出かけた事があります（尤も和田、三宅などの先生方も交つては居ました）その後、此寫生會の他に書畫會などを催して私の青山の宅へも来て頂いた事があります。又早稲田畫會の顧問に成つてもらつたりした。あーほんとに親切な好い先生——何だつて早く死んでおしまいなすつた!? 此間も文展の『柳』の前で私はしばらく泣いたのでした。小波